

文明の成立と古代文明の特質

農耕・牧畜が始まると、大河流域を中心にエジプト文明・メソポタミア文明・インダス文明・中国文明などが栄えた。アメリカ大陸中・南部にも独自の古代文明が生まれた。

Q▶ 各地の古代文明はどのような特徴をもっていたのだろうか。また、それらに共通する特質は何だろうか。

文明の誕生

Q▶ 自然環境の変化をきっかけに、人々の生活や社会はどのように変化したのだろうか。

農耕と牧畜のはじまり

Q▶ 農耕・牧畜は、自然環境のどのような変化から生まれたのだろうか。

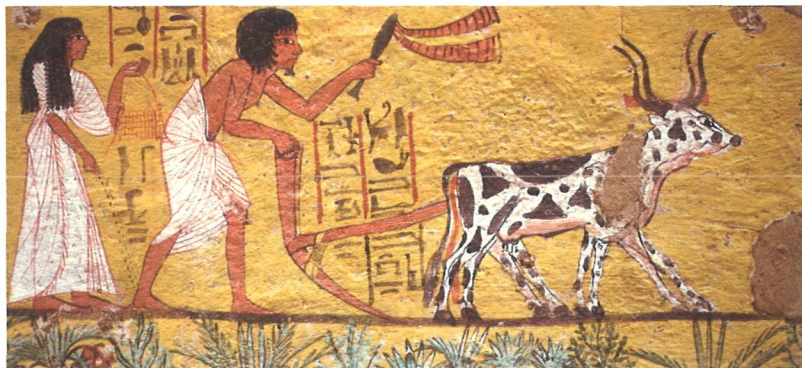


彩文土器 赤・黒・茶などの彩色文様をつけた土器。良質の粘土を用いて器体が薄く、メソポタミアを中心に東西に伝播した。



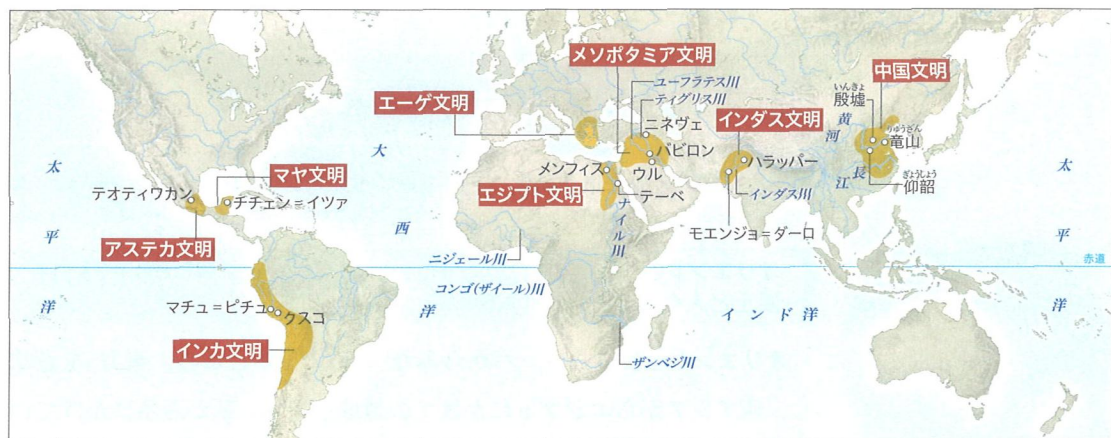
磨製石器 新石器時代を特徴づける、砂や砥石で磨いた石器。写真は磨製石斧で、マルタ島出土のもの。

農耕をおこなう男女 牡牛に犁を牽かせて土地を耕す男性と、その後について種をまく女性。前1200年頃のエジプトの壁画より。



約1万年前に氷期が終わると地球は温暖化し、自然環境が大きく変化したため、新人は地域ごとの多様な環境に適応していった。そのなかでもっとも重要だったできごとは、約9000年前の西アジアで、麦の栽培とヤギ・羊・牛などの飼育が始まったことであった。これが農耕・牧畜の開始である。これにより人類は積極的に自然環境を改変する能力を身につけ、食料を生産する生活を営みはじめた。人類史は、狩猟・採集を中心にした獲得経済から、農耕・牧畜による生産経済に移るという重大な変革をとげたのである。その結果、人口は飛躍的に増え、文明誕生の基礎が築かれた。

農耕・牧畜が始まると、人類は集落に住み、織物や土器をつくり、また石斧・石臼などの磨製石器を用いた。新石器時代の始まりである。



おもな古代文明とその遺跡

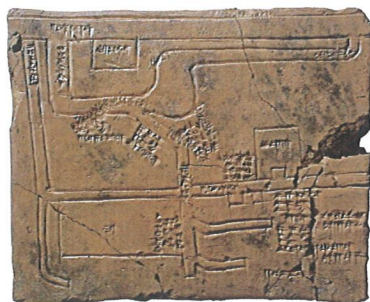
のような初期農耕民の新石器文化は、アジア・ヨーロッパ・アフリカの各大陸に広がった①。

① アメリカ大陸には「新石器時代」という時代区分は用いられないが、農耕は古くからおこなわれていた。

文明の誕生

Q▶ 文明が生まれるためには、どのような条件が必要だったのだろうか。

初期の農耕は雨水だけに頼り、また肥料を用いない方法がとられていたため、収穫が少なく、耕地も替えていかなければならなかった。しかし、メソポタミア②をはじめとする地域で灌漑農業が始まると、食料生産が発達してより多くの人口をやしなうことが可能になり、多数の人間



ユーフラテス川沿岸の灌漑水路を表した粘土板(前17世紀)

を統一的に支配する国家という仕組みが生まれた。こうしてナイル川、ティグリス川・ユーフラテス川、インダス川、黄河・長江などの流域に文明が誕生し③、やや遅れてアメリカ大陸にも独自に文明が形成された。

② ギリシア語で「川と川のあいだ」という意味で、ティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域(ほぼ現在のイラクにあたる)をいう。

③ アフリカでは、ナイル川のほかに西アフリカのニジェール川、中央アフリカのコンゴ(ザイール)川、南部アフリカのザンベジ川の流域で、それぞれ古くから農耕がおこなわれていた。

こうした文明においては、宗教や交易の中心である都市が生まれ、支配する人とされる人とのあいだに階級の差が生じた。また、武器や工具などの金属器がつくられ、多くの文明では政治や商業の記録を残すための文字も発明された。文字の使用によって、人類は過去の記録を参考に将来に備え、複雑で抽象的な思考をすることもできるようになった。ここから人類史は、歴史時代に入っていった。さらにそれぞれの文明は、その地域の自然環境によって様々な特色をみせた④。

④ 16世紀頃にはじまる「世界の一体化」(→p.161)の以前にも、世界各地では言語や宗教を共通の基盤として、独自の特徴をもつ文化的なまとまりが形成されていた。本書では、こうしたまとまりを「東アジア世界」「地中海世界」などの表現を用いて示している。

古代オリエント文明とその周辺

2

Q▶ 古代オリエント文明は、世界の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。



バビロニアの地図 下部に刻まれた円は海を表し、その内側が当時考えられた世界全体で、外側は想像上の世界。中央の縦長の線はティグリス川・ユーフラテス川(またはユーフラテス川のみ)を、小さな円は都市を表している。

オリエントの風土と人々

Orient

オリエントとはヨーロッパからみた「日ののぼるところ、東方」を意味

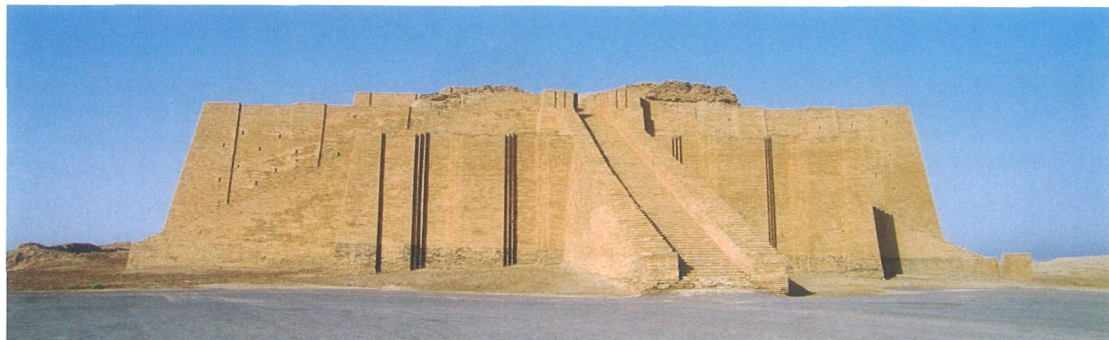
し、西アジアからエジプトにかけての地域を指す。秋から冬にかけての雨季以外には降雨がほとんどなく、乾燥して気温が高いために、砂漠・草原・岩山が多い。羊やラクダを飼育する遊牧生活に加えて、沿海や河川流域の平野、あるいはオアシスで、小麦・大麦・豆類・オリーブ・ナツメヤシなどを栽培する農業が営まれてきた。とくにティグリス川・ユーフラテス川、ナイル川など大河の流域では、定期的な増水を利用して早くから灌漑農業がおこなわれ、高度な文明が発達した。

ティグリス川・ユーフラテス川流域のメソポタミアには、周辺からセム語系やインド＝ヨーロッパ語系の遊牧民が豊かな富を求めて移住し、興亡を繰り返した。一方、ナイル川のめぐみをうける豊かなエジプトは、砂漠と海に囲まれているため、エジプト語系の人々が長期にわたって高

Q▶ オリエントの風土は、その文明の特質とどのような関係にあるのだろうか。

古代のオリエント





度で安定した文明を営んだ。また両地方を結ぶシリア・パレスチナ地方は、メソポタミアとあわせて「肥沃な三日月地帯」を形成し、小麦やオリーブの栽培がおこなわれるとともに、セム語系の人々が地中海や内陸部での交易で活躍した。オリエン特社会では、大河を利用した治水・灌漑をおこなうために、早くから宗教の権威によって統治する強力な神権政治が出現し、独自の信仰生活と文化を生み出した。

オリエン特の西に広がる地中海は、重要な交通路として早くからその周辺に1つの文化的なまとまりを形成し、沿岸部の都市を中心に文明が発達した。他方、陸地は山がちで、夏は暑く乾燥し冬に少量の雨がふり、大河や肥沃な大平野にはめぐまれなかった。土壌はやせた石灰岩質で、穀物生産に適したエジプト・黒海沿岸などを除けば、大部分の土地はオリーブ・ブドウなどの果樹栽培やヤギ・羊の牧畜に適している。

シュメール人の都市国家

Q 都市国家に富や権力が集まったのはなぜだろうか。

灌漑農業の発達したメソポタミア南部では、前3500年頃から人口が急激に増え、神殿を中心に数多くの大村落が成立した。やがて文字が発明され、銅器・青銅器などの金属器が普及しはじめた。

前3000年頃には大村落が都市へと発展し、前2700年頃までにウル・ウルクなどシュメール人(民族系統不明)の都市国家が数多く形成された。

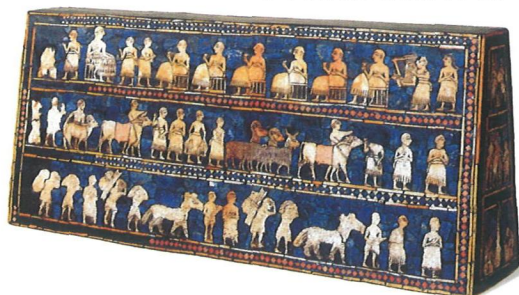
これらの都市国家では、王を中心に、神官・役人・戦士などが都市の神をまつり、政治や経済・軍事の実権を握って人々を支配する階級社会が成立した。その結果、優勢な都市国家の支配層には莫大な富が集まり、壮大な神殿・宮殿・王墓がつくられて、豪華なシュメール文化が栄えた。しかし前24世紀には、都市国家はセム語系のアッカド人によって征服された。

ジググラト(聖塔) シュメール人の都市国家ウルの遺跡にある、復元された煉瓦造りの塔。王や神官は、正面と側面から階段をのぼったところにある祭壇で都市の神をまつた。



ウルのスタンダード

ウルのスタンダード ウルの遺跡から発見された横長の箱の工芸品。発見した考古学者の説にしたがってスタンダード(旗章、軍旗)と呼ばれるが、実際の用途は不明である。前後左右の面には、戦争や貢納の場面を表したとみられるモザイクがほどこされている。



ハンムラビ法典(抜粋)

1. 人が他人を殺人の罪で告訴し、その罪を立証できなかったなら、告訴人は殺されなければならない。
195. 息子がその父親を殴ったならば、彼は自分の腕を切り落とさなければならない。
196. 他人の目をつぶしたならば、自分の目をつぶさなければならない。
199. 他人の奴隷の目をつぶしたり、他人の奴隷の骨を折ったならば、奴隷の値段の半額を支払わなければならない。

(中田一郎訳『ハンムラビ法典』、一部改変)



スサ(イラン)で発見されたハンムラビ法典碑と楔形文字。碑上部の浮き彫りで、玉座に座する太陽神を崇拝しているのがハンムラビ王。下の楔形文字はハンムラビ法典碑の一部で、イギリスのローリンソン(1810~95)らによって解読の手がかりが示された。碑全体の高さ2.25m。



ハンムラビ法典

Q▶ 復讐法の原則がみられる条文はどれだろうか。また被害者の身分によって刑罰に差があるのはなぜだろうか。

メソポタミアの統一と周辺地域

Q▶ メソポタミア文明が今日に残した文化的遺産には、何があるだろうか。

アッカド人はメソポタミア南部の都市国家をはじめて統一したが、その統一国家は前22世紀に崩壊した。その後、前19世紀初めにセム語系の **Amurites** **アムル人** がバビロン第1王朝をおこし、**Hammurabi** **ハンムラビ王** のときに全メソポタミアを支配した。王は首都バビロンで神の代理として政治をとりおこない、運河の大工事によって治水・灌漑を進め、また **ハンムラビ法典** を発布して、法にもとづく強力な統治をした。その刑法は「目には目を、歯には歯を」の復讐法の原則に立っていたが、刑罰は被害者の身分によって違っていた。

① バビロンを中心とするメソポタミア南部の地域。

ヒッタイトの戦車 ヒッタイトで用いられた戦車は2人乗り・2輪で、軽量かつ速かった。



ハンムラビ王の時代に栄えた文明の影響は、周辺の諸民族にもおよんだ。そのうち、早くから鉄器を使用していたインド＝ヨーロッパ語系の **Hittites** **ヒッタイト人** は、前17世紀半ば頃、アナトリア高原に強力な国家を建設し、メソポタミアに遠征してバビロン第1王朝を滅ぼし、シリアにも進出してエジプトと戦った。また、**Kassites** **カッシート人** はザグロス山脈方面から南メソポタミアに侵入して、バビロン第1王朝滅亡後のバビロニア①を支配した。さらに北メソポタミアにおこった **ミタンニ王国** も西方のシリアへと領土を広げ、ヒッタイトに服属するまで強大な国力を保った。こうしてオリエントでは前15～前14世紀以降、諸王国が並立する複雑な状況が生まれた。

メソポタミアは多神教の世界であったが、民族が交替するごとに信仰される最高神もかわった。シュメール人

イギリス人のローリンソンらによって解読された。

が創始した^{くまがた}楔形文字は、言語の違いをこえて多くの民族に広まり、粘土^{ねん ど}板^{ばん きざ}に刻まれて用いられた。また、六十進法や^{たいいんれき}太陰暦が使用されるとともに、^{うらづき}太陰暦に閏月を設けて実際の季節とのずれを補正した^{たいいんたいようれき}太陰太陽暦^②も生み出され、天文^{れきほう}・暦法・数学・農学などの実用の学問も発達した。

エジプトの統一国家

Q> エジプト王国が長期にわたって安定した支配を続けられたのは、なぜだろうか。

「エジプトはナイルのたまもの」^③という言葉通り、エジプトではナイル川の増減水を利用して豊かな農業がおこなわれた。また、ナイル川の治水には、住民の共同労働と、彼らを統率する強力な指導者が必要であったため、全国を統一的に支配する仕組みが早くから発達した。

前3000年頃、エジプトではメソポタミアより早く、王^{Pharaoh}(ファラオ)による統一国家がつくられた。以後、一時的に周辺民族の侵入や支配を受けながらも、国内の統一を保つ時代が長く続いた。この間に約30の王朝が交替したが、そのなかでも古王国・中王国・新王国の3時代に繁栄した。

エジプトの王は生ける神であり、神官や役人を使って専制的な神権政治をおこなった。ナイル川下流域の^{Memphis}メンフィスを中心に栄えた古王国では、^{Khufu}クフ王らがおそらく自分の墓として、巨大な^{pyramid}ピラミッドを築かせた。

これは神である王の絶大な権力を示している。中王国時代には、中心は上エジプトの^{Hyksos}テーベに移ったが、その末期にシリア方面から遊牧民の

^{Hyksos}ヒクソスが流入し、国内は一時混乱した。しかし、前16世紀にヒクソスを撃退して新王国が成立し、さらにシリアへと進出した。前14世紀には

^{Amenhotep IV}アメンヘテプ4世^{Akhenaten}(アクエンアテン)が中部エジプトのテル＝エル＝アマ^{Aten}ルナに都を定め、従来の神々の崇拝を禁じて一つの神(アテン)だけを信

ヒッタイトの鉄剣
古くは隕鉄などの自然鉄を用い、さらに鉄鉱石を製錬して鉄器を製造した。



^②月の運行にもとづく太陰暦では、1年が354日となって実際の季節とのずれが生じてしまう。そこで閏月を設けてこれを補正したのが太陰太陽暦である。おおむね19年に7回の割合で閏月を設ける。

^③ギリシアの歴史家ヘロドトス(→p.73)が書き記した言葉。ナイル川は毎年7～10月に増水・氾濫して、上流から沃土を運んだので、エジプトではほかの地域に比べて豊かな農業が営まれた。

ギザのピラミッド カイロの南西13km、ナイル川西岸に並ぶ。左が最大のクフ王のピラミッド。



ラムセス2世(在位前1279頃～前1213頃)は、シリア方面に進出し、ヒッタイト人の王国と抗争した。新王国は「海の民」の攻撃を受けて衰退した。

文字の継承 フェニキア文字は22のアルファベットからなり、のちにギリシア文字を経てラテン文字(ローマ字)やキリル文字に継承された。またアラム文字から派生した文字としては、ヘブライ文字・シリア文字・アラビア文字、さらに東方のソグド文字・ウイグル文字・モンゴル文字・満洲文字などがある。



前13世紀頃にギリシア・エーゲ海方面から「**海の民**」と呼ばれる人々が進出し、この地方を支配していたエジプト・**ヒッタイト**の勢力が後退すると、それにかわってセム語系のアラム人・フェニキア人・ヘブライ人らの活動が活発になった。

アラム人は、前1200年頃からシリアのダマスカスを中心に内陸都市を結ぶ中継貿易で活躍した。そのためアラム語が国際商業語として広まり、アラム文字は楔形文字にかわってオリエントで広く用いられるようになった。

フェニキア人は、東地中海に面したシドン・ティルスなどを拠点として地中海交易を独占し、北アフリカの**カルタゴ**をはじめとする多くの植民都市を建設した。また、フェニキア人は、カナーン人の表音文字からフェニキア文字をつくり、これはのちのアルファベットの起源となった。

遊牧民であった**ヘブライ人**は、前1500年頃パレスチナに定住し、その一部はエジプトに移住した。しかし、エジプトでは新王国による圧政に苦しみ、前13世紀頃に指導者モーセのもとでパレスチナへ脱出した(「出エジプト」)。ヘブライ人はパレスチナに統一王国を建て、**王国は前**

10世紀頃に繁栄したが、のち北の**イスラエル王国**と南の**ユダ王国**に分裂した。その後、イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ(前722年)、ユダ王国も**新バビロニア**に征服されて、前586年、住民の多くはその都の**バビロン**につれ去られた。これを**バビロン捕囚**という。

ヘブライ人は唯一の神ヤハウェへの信仰を固く守り、やがて、神により選民として特別の恩恵を与えられているという選民思想や、救世主(メシア)の出現を待望する信仰を生み出した。彼らは約50年後にバビロンから解放されて帰国すると、イエルサレムにヤハウェの神殿を再興し、



レバノン杉の輸送 地中海の交易で活躍したフェニキア人は、レバノン山中の杉を造船や輸出のために大量に伐採した。

①ヘブライ人とは他民族による呼び名で、彼ら自身はイスラエル人と称した。またバビロン捕囚後は、ユダヤ人と呼ばれることが多い。

②こうしたヘブライ人の歴史は、おもに『旧約聖書』の記述にもとづくものである。一方、その実証性については考古学など別の視点からの異論もある。

ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚(『旧約聖書』列王記、25章(前6世紀以降))

バビロンの王ネブカドネツアルとその全軍は、……イエルサレムに向けて出陣し、……周囲に包囲壁を築いた。都は包囲され、ゼデキヤ王^①の治世第11年に至った。第4の月の9日、都の中では飢えが厳しくなり、ついに国の民の食料が尽きてしまった。その時、都の一角が破られ、……〔ゼデキヤ〕王の軍勢は皆、王を見捨てて散って行った。カルデア軍は王を捕らえ、バビロンの王のもとに引き連れて行き、判決を言い渡した。そしてゼデキヤの子どもたちをその目の前で惨殺

し、ゼデキヤの両目をつぶし、青銅の足かせにつないでバビロンに連行した。……第5の月の7日、バビロンの王ネブカドネツアル王の治世第19年に、バビロンの王の家臣、親衛隊長ネブザルアダンがイエルサレムにやって来た。そして主の神殿と王宮を焼き払い、イエルサレムの建物をすべて、火で焼き尽くした。……こうしてユダ^②は自分の土地を追われ、捕囚の身となったのである。

(聖書協会共同訳『聖書』)

①ユダ王国最後の王。②ユダ王国の住民のこと。

Q 「バビロン捕囚」はヘブライ人の思想にどのような影響を与えたのだろうか。

ユダヤ教を確立した。そこからのちに生まれたのがキリスト教である。

→p.83

ユダヤ教の教典はキリスト教では『旧約聖書』と呼ばれ、『新約聖書』と並んでのちのヨーロッパ人による思想・芸術活動の大きな源泉となった。

→p.83

エーゲ文明

Q クレタ文明とミケーネ文明のあいだには、どのような性格の違いがあったのだろうか。

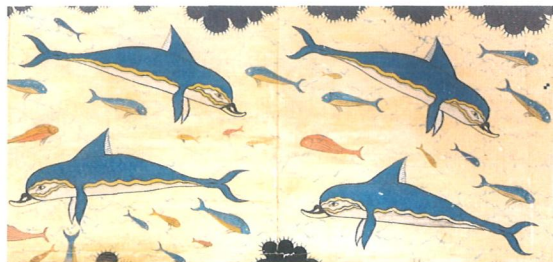
ギリシアの東地中海沿岸では、オリエントからの影響のもとにヨーロッパではじめての青銅器文明が誕生した。これをエーゲ文明^{Aegean}という。

エーゲ文明は、まずクレタ島で栄えた。前2000年頃に始まるクレタ文明^{Kreta}は、壮大で複雑な構造をもつ宮殿建築が特徴である。クノッソス^{Knossos}に代表される宮殿は、宗教的権威を背景に巨大な権力を握った王の住居であった。この文明を築いた人々の民族系統は不明であるが、彼らは外部勢力への警戒心が薄く、宮殿は城壁をもたなかった。

一方、ギリシア本土では、前2000年頃に北方から移住したインド＝ヨーロッパ語系のギリシア人が、クレタやオリエントの影響を受けて前16世紀からミケーネ文明^{Mykenai}を築きはじめた①。ミケーネ文明のギリシア人は、ミケーネ・ティリンス・ピュロス^{Tiryns Pylus}などに巨石でできた城塞王宮とそれを中心にした小王国を建てた。クレタ文明の人々に比べ、戦闘的で軍事に関心が高かったのが彼らの特徴である。彼らは前15世紀にはクレタ島にも侵入して支配下におき、さらにその勢力はアナトリアのトロイア^{Troia}(トロヤ)にまでおよんだ。粘土板に残された線文字B文書の解読により②、これらの小王国では、王が役人組織を使って地方の村々から農産物・家畜や武器などの手工業製品を王宮に集め、それらを需要に応じて再び各地に分配していたことが明らかにされている。

①19世紀後半以降、ミケーネ文明はドイツのシュリーマン(1822～90)、クレタ文明はイギリスのエヴァンズ(1851～1941)らによる発掘で、それぞれその姿が明らかになった。

②線文字Bはミケーネ時代のギリシア人がクレタ文明の線文字A(未解読)に学んでつくった音節文字で、イギリスのヴェントリス(1922～56)らが解読した。



クノッソス宮殿の壁画(復元) 壁画には海洋民族らしく人物や海の生物などがいきいきと描かれ、明るく開放的で平和な文明であったことがうかがわれる。



ミケーネ文明の諸王国は前1200年頃に突然破壊され、滅亡した。王宮による支配体制の行き詰まりや気候変動、外部勢力の侵入^③など複数の原因によるものらしいが、滅亡のはっきりした事情は不明である。

ミケーネ城塞の獅子門 王宮の正門とそれを飾るライオンの浮き彫り。巨大な城壁は軍事的関心の高さと王の権力の大きさを物語る。

③ この外部勢力が、同じ頃に東地中海一帯を襲った系統不明の「海の民」(→p.25)であったという説もある。

④ 前2千年紀とは、前2000～前1001年のあいだを指す。前何千年紀という表現は、先史や古代において、はっきりした年代が不明な場合に用いられることが多い。

⑤ クシュ王国は、エジプトを除けばもっとも古いアフリカ人の国として知られている。

オリエントの統一と分裂

Q アッシリアがオリエントをはじめて統一することができたのは、なぜだろうか。

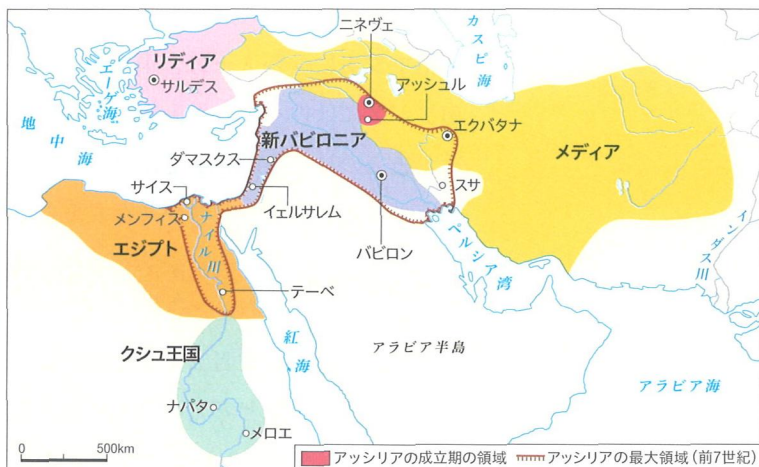
前2千年紀^④初めに北メソポタミアにおこったアッシリア王国^{Assyria}は、アナトリア方面との中継貿易によって栄えたが、前15世紀には一時ミタンニ王国に服属した。しかし、その後に独立を回復し、鉄製の武器と戦車・騎兵隊^{→p.22}などを用いて、前7世紀前半に全オリエントを征服した。なお、前11世紀に新王国が滅亡した後のエジプトには、ナイル川上流に成立したクシュ王国^{Kush}が前8世紀から進出していたが、アッシリアの侵攻を受けてエジプトの南方へと退いた。

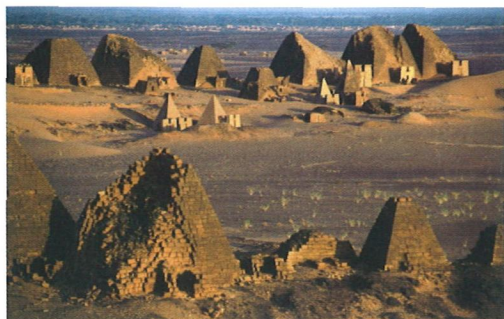
アッシリア王は、政治・軍事・宗教など様々な面で強大な権力をもつ専制君主であり、国内を州にわけ、駅伝制^{えきでんせい}を設け、各地に総督^{そうとく}をおいて

アッシリアと4王国の領域



アッシュルパニバル王の狩猟 アッシリア王の勇壮な狩りの様子を描いた石製の浮き彫り。アッシリアの首都ニネヴェから出土。





メロエのピラミッド クシュ王国はエジプト文明の影響を強く受けた。前3世紀からは王の墓である大小のピラミッドがメロエに建てられた。

とうち統治した。しかし、この大帝国も重税と^{あつせい}圧政によって^{ふくぞくみん}服属民の反抗をまねいて前612年には崩壊し、オリエントにはエジプト、アナトリアの^{Lydia}リディア、^{Neo Babylonia}新バビロニア(^{Chaldea}カルデア)、イラン高原の^{Media}メディアの4王国が分立することになった。一方、南方へ退いた^{クシュ王国}はメロエに都をうつして製鉄と商業によ

前670頃～後350頃

って栄え、メロエ文字(未解説)を用いた。この王国は、のち4世紀にエチオピアの^{Axum}アクスム王国によって滅ぼされた。

紀元前後頃～12世紀

→p.109

南アジアの古代文明

3

Q▶ 南アジアの古代文明は、世界の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。

南アジアの風土と人々

Q▶ どのような地理的環境が、南アジアの多様性を生み出したのだろうか。



^{リディア}リディアの^{かへい}金属貨幣 ^{リディ}アでは、世界ではじめての金と銀の合金による金属貨幣がつくられた。

現在のインド共和国やその周辺は南アジアと呼ばれ、ヒマラヤからデカン高原、そしてインド洋の島々に至る、世界最高峰の^{さいこうほう}山々や砂漠、大平原、ガンジス川などの^{たいが}大河を含んだ多様な地域である。季節風(モンスーン)の影響を強く受け、^{うき}雨季と^{かんき}乾季の差がはっきりしており、夏と冬のあいだで激しい寒暖差のある北部地域と、年間を通じて気温の高い南部地域とに大きく二分される。南アジアでは、季節風がもたらす雨を蓄えて稲やヒエ・アワが、また乾季を利用して麦が栽培され、それらの農業と牛や羊などの飼育を組み合わせた生産活動がおこなわれてきた。

南アジアに住む人々は、大きくアーリヤ系とドラヴィダ系にわかれる。南アジアには古くから異民族が進入を繰り返したが、進入した民族は、それまでの社会の影響を受けつつも完全に同化されてしまうことはなく、多くの民族・言語・宗教が共存する独自の世界が形成された。

インダス文明

Q▶ 南アジア最古の文明が栄えたのは、どのような場所だったのだろうか。

南アジア最古の文明は、前2600年頃におこった^{せいどうき}青銅器時代の都市文明で、ドラヴィダ系と考えられる^{Indus}インダス文明である。インダス川流域の^{モエンジョ＝ダーロ}モエンジョ＝ダーロや^{ハラッパー}ハラッパーを代表とする同文明の遺跡は、すぐれ^{下流域}下流域^{中流域}中流域

モエンジョ＝ダーロ出土の印章 モ
エンジョ＝ダーロやハラッパーから
出土した印章には、牛や架空の一角
獣などをモチーフにしたものが多い。
上部にインダス文字が記されている。



モエンジョ＝ダーロ サイズの一定した煉瓦が広く用いられて整然とした街並をつくっているこの遺跡も、地下水位の上昇による塩害により煉瓦の風化が急速に進んでいるため、現在も懸命な保存作業が続けられている。

た都市計画にもとづいてつくられ、沐浴場や穀物倉なども備えた煉瓦造りの都市遺跡であり、南アジア西北部の広い範囲に分布している①。

遺跡からは、現在でも未解読のインダス文字が刻まれた印章や、ろくろでつくられた彩文土器が発見されている。のちのヒンドゥー教の主神であるシヴァ神の原型とみられる像や牛の像などもみつかり、南アジアの文明の源流と考えられている。インダス文明は前1800年頃までに衰退したが、その原因は解明されていない②。

アーリヤ人の進出と ガンジス川流域への移動

Q アーリヤ人の進出は、南アジアにどのような変化をもたらしたのだろうか。

前1500年頃、中央アジアから、インド＝ヨーロッパ語系の牧畜民であるアーリヤ人が、パンジャブ地方に進出しはじめた。

アーリヤ人は部族を単位として活動し、この頃にはまだ人々のあいだに大きな富や地位の差は生まれていなかった。彼らは雷や火などの自然神を崇拜し、様々な祭祀をとりおこなった。それらの宗教的な知識をおさめたインド最古の文献群はヴェーダと呼ばれ、そのうち、賛歌集の『リグ＝ヴェーダ』からは、この時期の多神教的な世界観を知ることができる③。

前1000年を過ぎると、アーリヤ人は、より肥沃なガンジス川上流域へ移動を開始した。森林の開墾に適した鉄器が使われるようになり、牛に牽かせる鉄の刃先をつけた木製の犁も生み出された。また、稲の栽培がおこなわ

① こうした都市遺跡の最初の発掘例がハラッパーであり、それが基準となったことから、インダス文明はハラッパー文明とも呼ばれる。

② 洪水説、放牧や樹木の伐採による環境破壊説、塩害による農業衰退説をはじめ様々な説があるが、決定的なものはない。

③ 各種ヴェーダが編まれた前1500年～前600年頃までの時代は、南アジア史においてヴェーダ時代とも呼ばれる。



インダス文明とアーリヤ人の進出

れるようになった。アーリヤ人は、農耕に従事する先住民とまじわって農耕技術を学び、定住の農耕社会を形成した。農耕社会への移行で生産に余裕が生じると、王侯・武士や司祭など、生産に従事しない階層が生まれた。そして祭式の体系化が進むなか、王が支配の正統性を示すため祭祀を主導し強い権力を得て、人々を支配するようになった。

5

①これらの4ヴァルナの下には、ヴァルナ制の枠の外におかれる被差別民が存在し、不可触民として差別されるようになった。なお、時代がくだるとともに、ヴァイシャは商人を、シュードラは農民や牧畜民を指すようになった。

②アーリヤ人と先住民のあいだには皮膚の色差があったために、「色」を意味するヴァルナという言葉が使われた。

③カーストとは、ポルトガル語で「血統」を意味するカスタに由来する言葉であり、インドでは「生まれ」を意味するジャーティという言葉が使われている。

④タリム盆地以西の中央アジアは、中国からみて西側に位置するため、「西域」とも呼ばれた。

こうと 黄土高原 黄河流域には、内陸の高原・砂漠地帯から風で運ばれた黄土が堆積している。



こうした過程で、バラモン(司祭)、クシャトリヤ(武士)、ヴァイシャ(農民・牧畜民・商人)、シュードラ(隷属民)①という4つの身分に人々はわかれるとする、**ヴァルナ制**②と呼ばれる身分的上下観念が生まれた。バラモンたちは、複雑な祭祀を正確にとりおこなわなければ神々から恩恵を受けることができないとして、自身を最高の身分とした。そのため、彼らがつかさざる宗教を**バラモン教**という。さらに、特定の信仰や職業と結びついたり、あるいはほかの集団の者との結婚や食事などを制限することで結合をはかる**ジャーティ**(カースト)③が多数生まれてきた。これらのジャーティはヴァルナ制と結びつき、たがいに上下関係を主張するようになった。ヴァルナ制と様々なジャーティの主張とが組み合わさった社会制度は南アジア社会の基層となり、のちにカースト制度として展開することになった。

10

15

中国の古代文明

4

Q ▶ 東アジア各地には、自然環境に根ざす多様な地域的特徴が生まれた。これらはどのように結びついていったのだろうか。

20

東アジアの風土と人々

Q ▶ 東アジアには、気候の異なる地域がどのように混在しているのだろうか。

東アジアとは、長江・黄河流域の農耕地帯を中心とするユーラシア大陸東部と沿海の諸島をいう。長江流域からベトナム北部にかけての地域、

朝鮮半島南部・日本列島は季節風(モンスーン)の影響が強い湿潤な気候で、おもに稲作がおこなわれてきた。降水量の比較的少ない黄河流域は畑作が中心で、中国東北地方・朝鮮半島北部の冷涼な森林地帯では狩猟・採集が生業とされていた。東アジアに隣接するモンゴル高原やチベット高原は草原が広がる遊牧地帯で、タリム盆地④の砂漠のな

25

30

→p.39



東アジアの地勢とおもな先史文化圏 遼河流域の龍形玉器は殷にも伝わり、中国の龍を尊ぶ文化の源になったともいわれる。良渚文化で発達した縦長の祭祀用の玉器(琮)は、殷において盛んに模倣された。四川盆地の三星堆文化では、殷の技術的影響のもと、独特のデザインをもった青銅器が多くつくられ、琮も受容された。

かにはオアシスが点在し、灌漑農業が営まれている。こうした東アジアや隣接地域の自然環境・生業の多様性は、各地に様々な先史文化を生み出すとともに、人々の移動や交流をうながした。

中華文明の発生

Q 東アジア各地の気候の違いは、生業にどのような影響を与えたのだろうか。

前6000年頃までに、黄河流域ではアワなどの雑穀を中心とした農耕が始まり、長江流域でも稲が栽培されるようになった。前5千年紀になると、黄河中流域において彩文土器(彩陶)で知られる仰韶文化が開花し、長江流域では人工的な施設をもつ水田が現れた。東北地方の遼河流域でも、狩猟・採集とあわせて雑穀の栽培がおこなわれるなど、独自の文化がはぐくまれた。

前3千年紀には地域間のヒトやモノの移動が盛んになり、黄河流域に西方から麦・羊がもたらされ、中・下流域では黒陶に代表される龍山文化

前5000～前3000年頃、長江下流域に成立した新石器文化の遺跡に河姆渡遺跡がある。

化が広がった。この時期の大規模な集落は、長江上流域の四川盆地から
もみつがっている。交流の活発化にともなう集団間の争いも生じ、集
落のまわりに土壁をめぐらした城郭が築かれ、複数の集落の連合体をた
ばねる首長も出現した。

殷王は神意を占って国事を決定
する**神権政治**を行った。

殷・周王朝

Q 殷と周の支配形態は、どのように異なっていたのだろうか。

①伝説では、殷に先だって夏王朝があったとされる。殷よりも古い王朝の存在を示唆する遺跡もみつがっているが、それが伝説上の夏王朝と同一のものであるかは確定されていない。また、殷末期の人々はみずからの邑を商と称したので、中国では殷のことを商と呼ぶ。

②こうした考え方にもとづく政權交替を、「易姓革命」(天子の姓が易り天命が革まる)という。天子とは天の子、つまり天命を受けた支配者のことである。

前2千年紀には、黄河上流域で牧畜が拡大し、長江流域では稲作への依存が強まるなど、地域ごとの自然環境に合わせて生業が多様化していた。各地域を結ぶ交通の要地であった黄河中流域では、政治権力の集中が進んで、殷王朝が誕生した①。王都の遺跡殷墟からは、西域産の材料を加工した玉器や南方の海で産出されたタカラガイも発見されており、殷が広域的な交易ネットワークの中心にあったことを示している。

当時の集落は、同族意識に支えられた氏族集団を中心に人々が共同生活をおくり、これを邑と呼ぶ。殷は豊かな経済力を背景に盛大な祭祀を実施し、宗教的権威によって多くの邑を従えた。複雑な文様をもつ青銅器には酒器や食器が多く、これらは祭祀に用いられた。殷では、国の重大な事柄はすべて神意を占って決定され、その記録に用いられた甲骨文字は漢字のもととなった。

鎬京に都をおいて華北を支配した。

西方の渭水流域におこった周は、武力よりも徳を重視し、徳の高い者には天からの命令で支配者となる資格が授けられると考えた②。周は前11世紀頃に殷を滅ぼすと、一族や功臣などに封土(領地)と人民を与え、

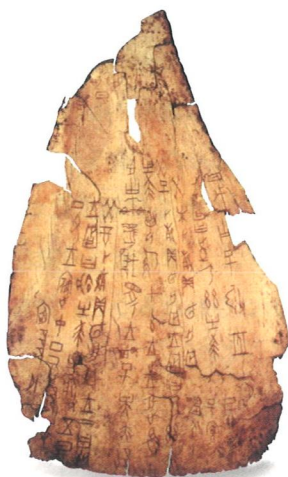
世襲の諸侯として国を建てさせる封建をおこなった。王や諸侯の家臣(卿・大夫・士)も、地位と封土を授けられた。この仕組みによって、氏族集団のまとまりだけではなく、各地の社会や文化の多様性も保たれた。

周では氏族集団が社会秩序の基礎であったので、親族関係にもとづいた規範(宗法)が重んじられた。また、服従の証として諸侯が周王に各地の特産



殷・周時代の青銅器 青銅器には想像上の獣の顔を描いて呪術的な力を表現することがあった。本来は黄金色で、現在の青緑色は経年変化によるものである。

甲骨文字の刻まれた獣骨 亀の甲羅や牛の肩胛骨などのくぼみに焼けた棒を押しあて、できたひび割れから神意を占い、結果を文字によって記録した。



『春秋左氏伝』 ※『春秋』の注釈書の1つ。

[齊の大臣の]管仲が、[覇者である齊の桓公に]このように申し上げた。「わたくしの聞いておりますところでは、疎遠な者は礼によってまねきよせ、遠方の者は徳によって手なずけるのだということです。徳と礼とをゆるがせにしなければ、帰順せぬ者はおりますまい」と。そこで桓公が諸侯に、礼にかなった振る舞い方をしようとなすと、諸侯の役人が[周王に手土産として]もっていく]特産品は何がよいかと相談にやってきた。(著者訳)

Q この一節から読み取れる、周王と諸侯の理想的な関係は、どのようなものであったのだろうか。



戦国の七雄(前4世紀末)

品をおさめる決まりも設けられた。こうした社会の上下関係を律する行動規範は礼と総称され、今日まで東アジアの社会に強い影響をおよぼしている。

春秋・戦国時代

Q 春秋時代と戦国時代の秩序の違いは、どこにあるだろうか。

前8世紀に周の王都が鎬京から洛邑(現在の洛陽)に移ると、周王の威光は衰え、諸侯が競い合うようになった。はじめは武力で他国を威圧した有力諸侯(覇者)が盟主となり、周王を支えて秩序を維持していたが、やがて小国の併合や大国の分裂がおり、前5世紀後半に諸国間の秩序は失われた。これより前の覇者の時代を春秋時代、後の時代を戦国時代と呼ぶ。こののち、諸侯は王を自称して、激しく争った。

戦国時代には、各地の社会・文化の特徴を反映した個性ある国づくりがおこなわれた。塩業で栄えた黄河下流域の齊、長江流域の文化圏に拠った楚、採集を生業とした東北の文化圏を代表する燕、遊牧民族の戦術を取り込んだ趙、西方の牧畜地域をおさえた秦など、とくに有力な7つの国は「戦国の七雄」と呼ばれる。一方、各国のあいだには、官僚を地方に派遣して中央との関係を強化したり、法制度を整えたりするなど、共通する動きもみられた。また、周の諸侯がおさめた範囲を「中国」とみなす考え方が現れたように、1つの文明圏としてのまとまりも生まれてきた。この「中国」意識は、みずからを文化の中心とし、生活習慣の異なる他者を「夷狄」とさげすむ華夷思想と結びついていた。

周の東遷から、晋を三分した韓・魏・趙が周王に諸侯と認められるまでの時代。有力諸侯が、周王室の権威の下、「尊王攘夷」をとって覇権を争った。

③ 春秋の名称は孔子の編んだとされる歴史書『春秋』から、戦国の名称はこの時代の遊説者の策謀について記した『戦国策』という書物の名前からとられたものである。

④ 齊・楚・燕・趙・秦のほか、魏・韓を合わせた7国。

前403年に晋が分裂して韓・魏・趙が諸侯と認められてから、秦の統一までの時代。諸侯は公然と王を名乗り、周王の権威は失墜して実力主義の時代になった。

漢代の文書 細長い木片を利用した木簡をひもで縛って巻物にしている。また、竹片の場合は竹簡と呼ばれる。写真は漢代のもの。



青銅貨幣 刀銭(刃物の形)は東北地方・黄河下流域、布銭(農具の形)は黄河中流域、円銭は渭水・黄河中流域でおもに用いられた。地金の重さをはかることで、形が違ってても通用させることができた。

●**韓非子**は韓の王族で**荀子**に学んだ法家思想の大成者。
●**外交策**を講じた縦横家(蘇秦・張儀)

●**蘇秦**は同盟によって秦に対抗する合従策を説いたが、張儀に敗れた。

●**張儀**は、諸国に秦との連衡を説いて成功した。

- ① **孔子**やその弟子の言行は、のち『論語』にまとめられた。
- ② 法や教化による働きかけではなく、君主の公平・無欲こそが社会の安定につながるという考え方。伝説上の聖人「黄帝」と、道家の祖とされる「老子」の教えを結びつけたものとされていたため、「黄老」と呼ばれる。



代表的な諸子百家

儒家	孔子、孟子(性善説)、荀子(性悪説)
道家	老子、莊子
法家	韓非子
墨家	墨子
兵家	孫子、呉子
縦横家	蘇秦(合従)、張儀(連衡)
陰陽家	鄭衍(五行説)

春秋・戦国時代の社会と文化

Q 鉄器の普及は、戦国時代の社会にどのような影響を与えたのだろうか。

春秋時代に出現した鉄器は、戦国時代に広まって、社会を大きく変化させた。鉄製農具の使用や犁を牛に牽かせる牛耕も一部で始まったが、より重要なのは、鉄器によって森林伐採が効率化し、農地が増加するとともに、多くの木材が建材や工業原料、燃料として供給されたことであった。また、文字を記録するために木や竹を細長く裁断した木簡・竹簡が登場し、文書による命令・情報の伝達が容易になった。他方、乱開発によって森林の面積が大きく減少したことで、華北の気候は乾燥化に向かった。

農業生産力の向上の一方で、氏族集団にもとづかない統治が進むと、氏族はしだいに解体され、一夫婦を中心とする小家族が、生産や課税・徴兵の単位である「戸」として重視されるようになった。また、農業や手工業の発展に応じて、商取引を仲立ちする青銅貨幣が普及し、豊かな大商人も現れた。個人の能力が重んじられる風潮のなかで、思想や技能を生かして社会的評価を得ようとする人々は、諸子百家と呼ばれる様々な学派をひらいた。

諸子百家のうち、春秋時代の孔子を祖とする儒家は、周の時代の徳による統治を理想とし、礼の実践を通して親子・兄弟の肉親愛を社会秩序にまで拡大することを説いた①。この考え方は戦国時代の孟子や荀子に継承された。現実主義に立った法家は、君主の権力を背景にした法の徹底を掲げ、秦に仕えた商鞅や李斯など実践的な政治家を生んだ。墨家も血縁をこえた人類愛や家柄によらない実力主義といった、時代を反映した主張を展開した。人為を否定して天の道に従うこと(無為自然)をとる老子・莊子ら道家の教えは、君主が社会に干渉しないことを理想とする黄老の政治思想②に影響を与えた。

南北アメリカ文明

5

Q 南北アメリカ文明がもつ、ほかの古代文明と異なる特徴は何だろうか。

南北アメリカの 風土と先住民

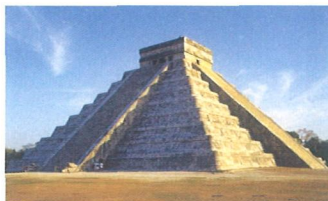
Q 北米と中南米の先住民社会には、どのような共通点と相違点があったのだろうか。

アメリカ大陸には、ベーリング海峡がアジアと陸続きだった氷期に、モンゴロイド(黄色人種)系と思われる人々が渡来して定着した。のちにヨーロッパ人から「インディオ」や「インディアン」と呼ばれることになるこの先住民は、南北に長く広がる大陸の各地で、それぞれの地域の環境に適応した文化・文明を発展させた。

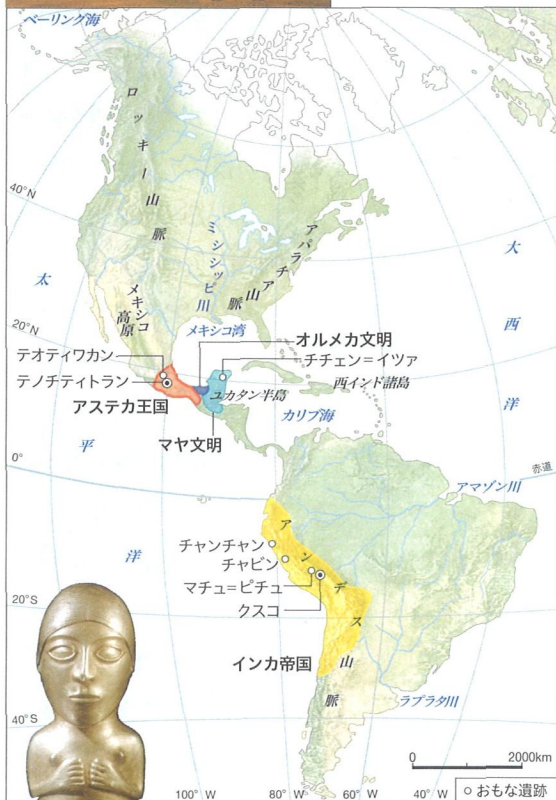
今日の北米地域は、その大半で気候は温暖であり、広大な平原にめぐまれている。この地で先住民は狩猟・採集を中心とする文化を築いたが、人口は希薄で、また高度な文明も発達しなかった。

一方、中南米地域では、熱帯雨林気候に属する赤道付近をはさんで、南北に乾燥地帯が広がっている。北方の現在のメキシコ南部と中央アメリカでは、トウモロコシを主食とする農耕文化が、また南方の南アメリカのアンデス地帯では、トウモロコシに加えてジャガイモも主食とする農耕文化がそれぞれ前2千年紀から発展し、やがて都市を中心とする先住民の文明が成立した。これらの文明は、ユーラシア大陸の諸文明とは関わりをもたずに独自の発展をとげたが、16世紀に進出してきたヨーロッパ人によって征服され、滅亡することになる。

→p.160



マヤ文明の神殿 マヤ文明・チチェン=イツァ遺跡(メキシコ)のピラミッド状の神殿。正確な天文学の知識や測量技術にもとづいて建造された。

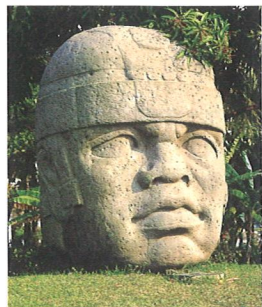


南北アメリカ文明とそのおもな遺跡



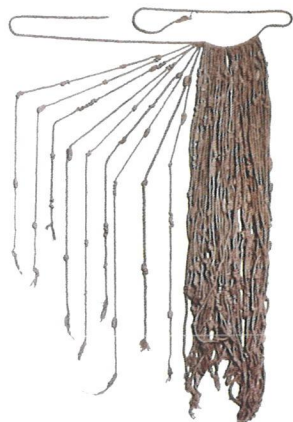
インカの黄金像 インカ帝国から伝わる数少ない黄金製品。こうした財宝はのち、ヨーロッパ人による略奪で多くが失われた(→p.158)。

マチュ=ピチュ バルーのアンデス山脈中、標高約2400mのマチュ=ピチュに残るインカ帝国の遺跡。大きく精巧な石造の神殿や貯蔵庫などが建てられており、その技術の優秀さと専制権力の強大さがしのばれる。



巨石人頭像 オルメカ文明の宗教遺跡で発見されたもの。高さ2.85m。この文明は宗教色が強かったとされ、肉食獣であるジャガーへの信仰なども知られる。

①アステカ王国の首都テノチティトランは、16世紀には世界最大級の人口をもつ都市だったと考えられている。



キープ 縄の結び方によって数字を示し、家畜と人口の調査をおこなった。



中南米の先住民文明

Q▶ 中南米にはどのような先住民文明が栄え、また、どのような支配体制が築かれたのだろうか。

メキシコ南部と中央アメリカの先住民文明の原型となったのが、前1200年頃までに成立したオルメカ文明である。その衰退後に、ユカタン半島で^{Maya}マヤ文明が成立し、メキシコ南部では^{Teotihuacán}テオティワカン文明が、その後^{Aztec}アステカ王国を中心とするアステカ文明が成立した。^{Maya}マヤ文明は4世紀から9世紀に繁栄期を迎え、ピラミッド状の建築物、^{にじゅうしんぼう}二十進法による数の表記法、精密な^{れきほう}暦法、マヤ文字などを生み出した。アステカ文明も、ピラミッド状の神殿を造営し、^{もう}絵文字を用いたほか、道路網でメキシコ各地と結ばれた巨大都市②や複雑な身分制度をもつ国家を築いた。10

他方、アンデスの高地では、前1000年頃に北部に^{Chavin}チャビン文化が成立して以降、様々な王国が現れたが、15世紀半ばに現在のコロンビア南部からチリにおよぶ広大な^{Inca}インカ帝国が、クスコを中心として成立した。インカの皇帝は太陽の子として^{すうはい}崇拜され、^{しんけん}神権政治をおこない、アステカと同様にほかの先住民部族を服属させるかたちの支配体制を築いた。15
インカ文明は^{せきぞう}石造建築の技術にすぐれ、発達した道路網^{もう}をもち、各地から物資がクスコに運ばれて^{ちくせき}蓄積された。文字はなかったが、縄の結び方で情報を伝える^{quipu}キープと呼ばれる方法で記録を残した。

これらの中南米の先住民文明は、大河ではなく雨水や泉を活用することで^{きやうりやう}丘陵・山岳に都市を築いた。また鉄器や車輪、馬などの大型の家畜は利用されなかった。20